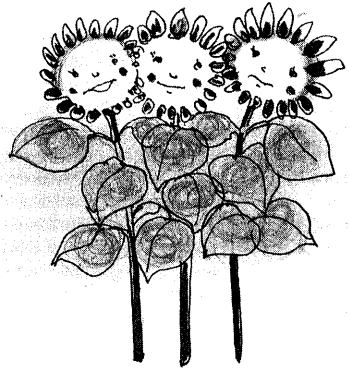


顔

津守 真



子どもがある行為をどのような気持ちでやっているかを保育の中で感じとることは比較的容易であるが、それが子どもの心の深いところにある疑問や願望と結びついていることに気が付くのは、ある条件に恵まれたときである。保育の積み重ねの中で洞察がえられることもあるし、また、違う子どもの類似の場合の省察がそれを助けることもある。

お化けごっこの遊び

五歳のH男は若い実習生に抱かれて走り回りながら、私に「お化けやって」と頼んだ。そのころH男は、大人が頭に布をかぶって追いかけるとキャッキヤと笑って逃げる遊びを好んでいたの、私も顔を手で蔽って「お化けだぞー」というと大声をあげて逃げた。子どもはそれを半分こわがりながら楽しんでるのがわかるので、何度もうり返した。

それをしながら私は、この子にとって周囲の人々はお化けのように不可解な存在なのではないかと気が付いた。つまり他人の同一性（アイデンティティ）、ひいては自分の同一性への疑問である。そこで私はお化けを演じながら、私の顔をはっきり見せ、お化けは私であることを確認するように試みた。

H男は普通の幼稚園にいつているが、いづらか発達も遅れており言語も不明瞭なので、他の子どもたちの中に入ってゆけず、指をくわえて傍観していることが多いという。きっと周囲で起こっていることを理解できないでいるのだろう。大人たちは親切で優しい反面、能力をこえたことを要求し激励するので、自分にとって大人とは何であるのかも不可解なのだろう。この子どものこういう生活環境を考えると、力相応のことを期待し承認してくれる大人の存在の必要性を感じさせられ、この数か月間私共はこの子と丁寧につき合うように心がけてきた。いま、この子にとって、周囲の人々は不可解ではなくて理解しうる存在になりつつあり、そのことがお化けごっこの遊びを生み出しているのだろう。

私はこの子とお化けごっこをしながら、かつて私の顔にえのぐを塗ってよろこんだ何人かの子どものことを思い出した。そのときには意味はよく分からなかったが、その子たちと私との間でたいせつなことが行われているように感じられ、私はそれを思い切って受けてたのしんだ。この人は自分らしく行動するのを助けてくれるのだということを確かめつつ、この子どもたちは私の顔にえのぐを塗っていたのだと思う。「顔」についての保育体験が、このお化けごっこの理解を助けてくれた。

H男との間のお化けごっこは、それ以来、次第に切迫感を減少させていった。二週間ほど経った日、いつも親しんでいる実習生に抱かれていたH男は、私を見ると身を乗り出し、真正面から私の顔をしげしげと見つめて、「これ　だーれ？」とたずねた。何度も遊んだことのある私を知らないはずはないのに、お化けではない私をあらためて知り直すことが必要なのだろう。そしてその日はお化けごっこの遊びにはならなかった。

顔とアイデンティティ——エリックソンの考察

顔がだれの顔だか分からないということは、自己同一性（アイデンティティ）の混乱にその基盤があることを、エリック・H・エリックソンはその著「責任と洞察」の中で考察している。彼はひとりの青年の「顔」の夢について語り、それが幼年期から現在に至る各時期のアイデンティティの問題と関連していることを述べる。その夢は次のようである。

「幌馬車時代の馬車に大きな顔が座っている。その顔には目も鼻もなく、のっぺらぼうである。顔のまわりには恐ろしい蛇のような髪の毛が巻きついていて。その顔は母親ではないかと思うがたしかではない。」　エリックソンは青年が自由に語りうる関係をつくる間に、顔のテーマが何度もくり返され、それが自我の形成に重要な意味をもつことに気付く。

青年の幼児期の記憶の中には、母親の優しく美しい顔が、あるとき強い感情のために歪んで見えたことが印象づけられている。子どもの一寸した反抗にも母親は度を失った。母親との関係の中で、どれだけ主体性を主張してよいのか分からない、幼児期のアイデンティティの問題がここにかくされて

いる。

少年期に、この青年は農場をもっていた祖父を深く尊敬し、頼りに思っていた。話が米国中西部の幌馬車時代に及ぶと、彼の語調は詩的で感傷的になった。青年期に祖父の死の直前、彼は祖父に反抗した。夢の中の顔は祖父の顔かもしれない。彼は自分の未来を、祖父のような知恵深い確固としたアイデンティティの上に築きたいと願っている。しかし彼の反抗がそれを破壊してしまったのではないかと恐れている。

この青年は神学生である。しかし職業を考えると、彼はそのことに疑いを感じ、そうすると精神的にも不安定になってしまう。夢の中の顔は神の顔かもしれない。

更に重要なことは、エリクソンに夢を語る青年との眼前の関係が指摘される点である。彼の白髪は顔のまわりに巻きついていてだれの印象にも残りやすい。この「顔」はエリクソン自身の顔ではないかと彼は考える。この心理相談の期間に彼は手術を受けることになっていた。関係はいつ中断されるかもしれない。繊細な神経の青年にとって、このことは不安定感を抱かせたであろう。「この人は何をおいても私のことを本気に考えてくれる人なのか、あるいは仕事として面倒をみてくれるだけなのではないか」と、青年は相談者に対する不信を暗示した。このことは、人間のことを専門とする者に共通に投げかけられる厳しい問いである。夢の中の「顔」は、関係の持続性に関する問いであると彼は考えた。

このような問いに直面して、相談者が、相手の分までも責任を引き受けることは不可能である。相談者は母親や祖父の代理をすることはできないし、神の立場を演じて本人の責任を代わって負うこと

もできない。そのことを認識しつつ、相手の行為を通して、その背後にある悩みや願望、基本的態度を洞察し、それに応答して新たな関係をつくり上げてゆくことが専門家のできることである。

エリクソンはこのはなしを臨床における解釈の妥当性についての論文の中で述べている。それは科学的研究における正答とは違い、相手が更に生きつづける希望をもってその場を立ち去るかどうかが、解釈の妥当性のきめ手になると言う。この点は保育においても同様である。

私が顔の意味に気が付いてお化けごっこの遊びをした日、H男は時間になっても帰ろうとしなかった。そして最後に、私を腰につかまらせ、自分が先頭に立って電車になり、スピードで走り回った。私を後に従えて走る。恐れや不安のもとである男性（多分父親だ）と思うが、これについてはここでは触れなかった）をひきつれて走る。これをしなければ一日は完結しなかったみたいである。

ひとつのこの理解がつくられかけた時には、子どもは次の舞台に足をかけており、保育者は新たな課題にさらされる。保育の実践は立ち止まる暇なく進行する。この次に「顔」の遊びに出会うとき、私はもっと容易にその子どもの見方に近づくことができるだろう。

（愛育養護学校）